燃櫛爲燭

ば、われにはよくてみえしかいとあやしきさまのきぬきて、大ぐしをつらくしにさしかけてをり、でづからいひもりをりけり、いといみじとおもひてきにけるまゝいらずなりにけり、とあり、こゝにつらくしとあるは、横面櫛にて、乃横に大なる黄楊の櫛を刺て居たるにはあらぬか、〇略下

〔古事記上〕故伊邪那美神者、因生火神、遂神避坐也、〇略中故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎、那邇二字略中以音、下教此、謂易子之一木乎、〇略上中於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黄泉國、爾自殿騰戸出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國未作竟、故可還、爾伊邪那美命答曰、悔哉不速來、吾者爲黄泉戸喫、然愛我那勢命、那勢二字以音、下教此、入來坐之事恐、故欲還、旦具與黄泉神相論、莫視我、如此白而、還入其殿内之間、甚久難待、故刺左之御美豆良、三字以音、下教之、湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮斗呂呂岐氐、〇略下

〔日本書紀一神代〕一書曰、〇略中伊弉冊尊曰、吾夫君尊、何來之晚也、吾已飡泉之竈矣、雖然吾當寢息、請勿視之、伊弉諾尊不聽、陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以爲秉炬而見之者、則膿沸虫流、今世人、夜忌一片之火、又夜忌擲櫛、此其緣也、

〔日本書紀二神代〕一云、〇略中是後豐玉姫、果如其言來至、謂火火出見尊曰、妾今夜當産、請勿臨之、火火出見尊不聽、猶以櫛燃火視之、時豐玉姫化爲八尋大熊鰐、匍匐逶蛇、〇略下

〔今物語〕近き御代に五節の比、ゆかりにふれて、たれとかやの御局へ、或女のやんごとなき、忍びて參りたりける事ありけるを、ちときこしめして、いかで御覽せんと思しけるまゝに、俄にをしいらせ玉ひけり、とりあへず、ともし火を人のけちたりければ、御ふところよりくしをいくらも取いでゝ、火びつの火にうちいれ給ひたりければ、おくまで見えて、よく〳〵御らんじけり、御心のふぜい興ありていとやさしかりけり、

投櫛絶緣

〔吾妻鏡四十〕建長二年六月廿四日戊午、今日居住佐介之者、俄企自害、聞者競集、圍繞此家、觀其死骸、